

常は認められなかった。

心拍数の増加が暴露時間中(昼間)及び暴露後期間中(夜間)、全群の動物で認められた。昼間及び夜間の心拍数増加は暴露期間後も継続し、正常範囲に戻るまで約2週間を要した。

このため、本試験ではNOECは求められなかった⁽³⁸⁾。

アカゲザル(雌雄各2匹/群)を用いた吸入暴露(0.0, 0.05, 0.17, 0.44mg/M³のエアロゾルを1日4時間、8日間(週末を除く))試験において認められた毒性所見は以下の通りであった。

一般的な臨床症状観察、体重変化、飼料摂取量、血液学的検査、血液生化学的検査、臓器重量、病理組織学的検査に異常は認められなかった。

0.44mg/M³投与群で夜間(4時間暴露後の8時間)の心拍数増加が認められた。この心拍数増加に累積効果は認められなかった。

本試験におけるNOECは0.17mg/M³°であった⁽³⁹⁾。

【ブタを用いた56日間亜急性毒性試験】⁽⁴⁰⁾

交雑種ブタ(雌雄各4頭/群)を用いた混餌(0.0, 20, 100, 500ppm; 0, 0.6, 3, 15mg/kg体重/日に相当)投与による56日間の対象動物に対する安全性試験において認められた所見は以下の通りであった。

一般的な臨床症状観察、体重変化、飼料摂取量に、投与に起因した異常は認められなかった。また、投与期間中に死亡例は認められなかった。

血液学的検査では、100ppm以上投与群の雌雄で、赤血球数、ヘモグロビン濃度、赤血球容積の減少が認められた。

血液生化学的検査では、100ppm以上投与群の雌雄で、尿素窒素の減少が認められた。また、全ての投与群で血漿クレアチニン濃度の増加が認められた。著者は、投与による骨格筋量の増大の結果ではないかとしている。

臓器重量では、500ppm投与群の雌雄で甲状腺の相対重量の減少が認められた他には異常は認められなかった。

剖検、病理組織学的検査では、肝門脈周辺へのグリコーゲンの蓄積が100ppm(3/8)及び500ppm(1/8)投与群に認められた。

本試験におけるNOELは求められなかった。

(3)慢性毒性試験

【イヌを用いた1年間慢性毒性試験】⁽⁴¹⁾

ビーグル犬(雌雄各4匹/群)を用いたカプセルによる強制経口(0.0, 0.112, 0.224, 5.68mg/kg体重/日)投与における1年間の慢性毒性試験において認められた毒性所見は以下の通りであった。なお、投与はそれぞれの一日量を3分割した用量に調節した2%顆粒剤含有カプセルを、午前7:00より6時間毎に3回投与する方法により実施した。対照群にはプラセボ含有カプセルを投与した。

一般症状として、5.68mg投与群において粗剛化(unkept)及び脂漏(oily)した被毛、一過性の末梢の発赤(腹部、耳及び歯茎)が認められた。一過性の末梢の発赤は0.224mg投与群の一部で投与初期に認められた。

体重変化、飼料摂取量に投与による影響はみられなかった。

血液学的検査では、5.68mg投与群の雌雄で赤血球数、血色素濃度、赤血球容積の減少が認められた。

° 暴露時間の24時間への補正は実施していない

血液生化学的検査では、5.68mg 投与群の雌雄で血清カリウムと尿素窒素の増加、血糖値、総コレステロール、トリグリセライド濃度の減少が認められた。

尿検査では投与による影響はみられなかった。

臓器重量では、5.68mg 投与群の雄で心臓重量の相対及び絶対重量の減少、雌で絶対重量の減少が認められた。

剖検では、5.68mg 投与群で腹部及び又は胸部脂肪のわずかな減少が認められた。

病理組織学的検査では、5.68mg 投与群で肝細胞中グリコーゲンの減少、胸腺及び又は大動脈周囲の褐色脂肪組織の代謝活性化に伴う変化が認められた。また、この用量群の1頭で心筋に慢性の部分的な炎症が認められた。

その他、眼検査、骨髄検査に投与による影響は認められず、心電図検査にも異常は認められなかった。

さらに、試験期間中の所定の日(29, 68, 83, 119, 155, 182, 211, 273, 366 日)について、初回投与前(休息時)及びその2、6、8時間後の心拍数の測定が実施された。休息時の平均心拍数は全ての投与群で対照群と比較して減少が認められた。期間別で見ると、この減少は7ヵ月目にはほぼ正常値に戻っていた。

通常の毒性所見のNOAELは0.224mg/kg 体重/日であったが、休息時の心拍数の減少は全ての投与群で認められたため、本試験におけるNOELは求められなかった。

【マウスを用いた21ヶ月間慢性毒性/発がん性併合試験】⁽⁴²⁾

CD-1 マウス(雌雄各60匹/群)を用いた混餌(0, 0.02, 0.1, 0.6%; 雄0, 25, 130, 840mg/kg 体重/日, 雌0, 35, 175, 1085mg/kg 体重/日に相当)投与による21ヶ月の慢性毒性/発がん性併合試験において認められた毒性所見は以下の通りであった。なお、6, 12, 18ヶ月目に血漿サンプルを採取し暴露状況を確認したところ、雌雄の全用量群で全身性の暴露が確認された。

一般的な臨床症状観察では、特に異常は認められなかった。しかし、高用量群では雌雄とも死亡率の増加が認められた。

体重変化では、中及び高用量群の雄で12ヶ月まで減少が認められた。中用量群はその後回復したが、高用量群は試験終了まで継続した。

飼料摂取量では、高用量群において雄で17ヶ月まで、雌で18ヶ月まで増加が認められた。

血液学的検査では高用量群の雌雄で赤血球数の増加が認められた。雄ではヘモグロビン濃度とヘマトクリット値も増加した。

血液生化学的検査では、雌の全ての投与群と高用量群の雄で尿素窒素の増加が認められた。高用量群の雄ではアルブミン/グロブリン比、総ビリルビンも増加していた。

腫瘍の発生頻度については、子宮平滑筋腫が雌の全用量群で認められた。発生頻度は0, 0.02, 0.1, 0.6%群でそれぞれ1.7, 8.3, 13.3, 16.9%であった。マウスにおける子宮平滑筋腫の誘導については、同じくβ-作動薬であるmedroxalol, sulbutamol sulfate, terbutaline sulfateでも認められているが、いずれもβ-受容体拮抗薬であるpropranololにより抑制されることが報告されている^{(43),(44),(45)}。従って、その作用機序はβ-受容体を介するものであることが示唆されるが、塩酸ラクトパミンについてpropranololによる子宮平滑筋腫の誘導抑制の確認は実施されていない。

本試験においてNOAELは求められなかった。

【ラットを用いた2年間慢性毒性/発がん性併合試験】⁽⁴⁶⁾

F344 ラット(雌雄各60匹/群)を用いた混餌(雄0, 2, 60, 200mg/kg 体重/日; 雌0, 2, 60, 200, 400mg/kg 体重/日に相当)投与による2年間の慢性毒性/発がん性併合試験において認められた毒性所見は以下の通り

であった。なお、6, 12, 18 ヶ月目に血漿サンプルを採取し暴露状況を確認したところ、雌雄の全用量群で全身性の暴露が確認された。

一般的な臨床症状観察では、投与に起因した毒性影響は認められなかった。

体重変化では、60mg 以上投与群の雌雄で体重増加率の低下が認められ、体重も低値を示した。

飼料摂取量では、雄の 60mg 以上投与群及び雌の 400mg 投与群で増加が認められた。

血液学的検査では 200mg 以上の投与群で赤血球数、ヘモグロビン濃度、ヘマトクリット値の増加が認められた。

血液生化学的検査では、60mg 以上投与群の雌で尿素窒素の増加が認められた。60mg 以上投与群の雄及び 200mg 以上投与群の雌で血清カリウム濃度の増加が認められた。また、200mg 以上投与群の雌雄で、コレステロール及びトリグリセライドの減少が認められた。

腫瘍の発生頻度については、200mg 以上投与群で子宮平滑筋腫(costo-uterine leiomyoma)の増加が認められた。発生頻度は 6/60、27/60 で他の群では発生は認められなかった。

本試験における NOAEL は 2mg/kg 体重/日であった。

【サルを用いた 1 年間慢性毒性試験】⁽⁴⁷⁾

アカゲザル(雌雄各 4 匹/群)を用いた強制経鼻胃挿管(0.0, 0.125, 0.5, 4.0mg/kg 体重/日)投与による 1 年間慢性毒性試験において認められた毒性所見は以下の通りであった。なお、塩酸ラクトパミンは、経口投与後速やかに吸収され、4.0mg 投与群の T_{max} は概ね 1 時間、 C_{max} は試験期間中を通じて同様であり(44~59ng/mL)、雌雄差もみられなかった。また、0.125mg、0.5mg 投与群における血漿中濃度は検出限界以下(<5ng/mL)であった。

一般症状、飼料摂取量、身体検査、眼検査、血液検査、血液生化学検査、尿検査、剖検及び病理組織学的検査については投与による影響はみられなかった。

体重変化では、4.0mg 群において増加が認められた。また、臓器重量では、0.5mg 以上投与群の雌で心臓及び脳の相対重量の減少が認められた。雄でもこの傾向が認められたが、有意ではなかった。

本試験においては、 β -作動薬が鋭敏な作用を及ぼすと考えられる心機能について、心電図の測定が実施された。この測定は、初日及びその後 5、9、14、26、39、52 週間後に実施された。0.5mg 以上の投与群で一日平均、安静時、夜間のいずれにおいても用量依存的な心拍数の増加が認められた。

心臓及び肺における β -アドレナリン作動性レセプター数については、4.0mg 投与群で肺の β -アドレナリン作動性レセプター数の減少が認められた。心臓では減少は認められず、レセプターの結合アフィニティー(K_d)にはいずれの投与群においても影響はみられなかった。

本試験における NOEL は 0.125mg/kg であった。

(4)繁殖毒性試験及び催奇形性試験

ウサギを用いた催奇形性試験は実施されていない。

【ラットを用いた 2 世代繁殖試験／催奇形性試験】⁽⁴⁸⁾

SD ラットを用いた混餌(2, 20, 200, 2000ppm)投与による 2 世代繁殖試験が実施されている。本試験は催奇形性試験を兼ねて実施された。被験物質の投与及び交配は次の要領で実施された。

F_0 世代では、雄(25 匹)には塩酸ラクトパミン添加飼料を離乳直後から交配前 10 週間投与し、雌(25 匹)には塩酸ラクトパミン添加飼料を 9 週齢から交配前 2 週間投与した。その後は雌雄とも繁殖試験期間を含め試験終了時まで塩酸ラクトパミン添加飼料を投与した。雌には分娩後 21 日まで f_1 児動物を哺育させた。その後 1 群あたり雌雄各 25 匹の F_1 動物を選抜し、各濃度の塩酸ラクトパミン添加飼料を 2 回の交配期間

を含め試験終了時まで投与した。交配は10週齢の同一用量群の雌雄のF₁動物で行い、雌は分娩後21日までf_{2a}児動物を哺育させた。F₁動物は休養期間後、再度同様に交配させた。2回目の交配の後雌を妊娠20日に安楽死させ、子宮内生殖パラメーターの評価、胎児の外表、内臓、骨格の観察を行った。すべてのF₀、F₁親動物は剖検し、生殖器官の病理組織学的検査を行った。なお、死亡は2000ppm投与群でのみ認められ、F₁世代の雄2匹、雌1匹が試験期間中に死亡した。剖検の結果、雄1匹には重度の進行性糸球体腎症と腹部、胸部、皮下脂肪の著しい減少を伴った消瘦が認められたが、他の2匹には肉眼的異常は認められなかった。

体重と体重増加の低値がF₀、F₁雄の2000ppm投与群で認められた。体重の低値はF₁雌の2000ppm投与群にも認められた。F₀、F₁妊娠雌の2000ppm投与群、F₀雌の20、200ppm投与群の分娩後1週に一過性の摂取量増加が認められたが、毒性学的には意義のない所見と考えられた。飼料効率は、F₀、F₁世代の成長期間中に2000ppm投与群の雄で低下した。

交尾能、受胎能には投与による影響は認められなかった。f_{1a}及びf_{2a}児動物分娩時の妊娠期間の長さは変化しなかったが、一腹産児数、産児生存率、哺育児生存率及び児体重は2000ppm投与群で低下した。分娩後21日において、2000ppm投与群の児体重は対照群と比べておよそ20%の低値を示した。2000ppm投与群のf_{1a}雄の割合は有意に低下したが、f_{2a}における性比に差はなかった。2000ppm投与群の哺乳期間中の児動物において、蒼白、低体温、消瘦、脱水、被毛粗剛の頻度が高かった。さらに、浮腫、口蓋裂、四肢及び肩の異常、小顎症、舌突出及び眼瞼の開裂を含む奇形の発生率が2000ppm投与群で上昇した。

f_{2b}児動物産生のためのF₁動物における2回目の交配試験では、2000ppm投与群における黄体数や着床数は減少したが、受精卵着床率に影響はみられなかった。しかし、2000ppm投与群で初期および後期胚死亡が増加したことによる胎児の生存率の低下が認められた。胎児重量、矮小胎児の発現率と性比に投与の影響はみられなかった。2000ppm投与群では胎児に奇形や変異の発現率の上昇が認められた。浮腫、羊水過多症、肩甲骨の歪曲、四肢異常等の異常が多く観察された。2000ppm投与群では頻繁に観察された変異は頭蓋冠、肋骨、椎弓、坐骨、恥骨の不完全骨化、副腎出血、波状肋骨、胸骨稜の不整と不完全融合等の変異が多く観察された。

病理組織学的検査では、投与に起因した異常はF₀、F₁親動物ともにみられなかった。

以上の結果から、本試験における生殖発生毒性に対するNOAELは200ppm(15mg/kg体重/日)であった。

【ブタを用いた1世代繁殖試験】⁽⁴⁹⁾

雌交雑種ブタ(約4ヶ月齢;44頭/群)を用いた混餌(20、60ppm)投与による1世代繁殖試験が実施されている。本試験はブタに対する安全性試験を考慮して実施されており、被験物質の投与及び交配は次の要領で実施された。

試験機関で飼育するブタから体重、扱いやすさ、乳頭数等を考慮して約4ヶ月齢の雌ブタ(体重約65kg)を選抜し、塩酸ラクトパミン添加飼料を投与した。試験は20頭、24頭の2回に分けて実施され、投与は体重が110kg程度になるまでの期間を目途に実施されそれぞれ47日もしくは45日間であった。これは養豚における仕上げ期に相当する。その後休養し、分娩させ、21日間授乳させた。試験期間中合計24頭が事故や発情しない等の理由で除外された。除外されたブタは対照群を含めほぼ均等に生じた。

発情率、分娩率、生産児数、死産児数、生産児・死産児体重、21日齢離乳頭数、離乳時体重について、投与の影響はみられなかった。

(5)遺伝毒性試験

変異原性に関する各種の*in vitro*及び*in vivo*試験の結果を次表にまとめた。

【変異原性に関する各種試験の結果一覧】

In vitro 試験

試験	対象	投与量	結果
<i>In vitro</i> 不定期DNA 合成	Fischer 344 ラット肝細胞	0.5~1000 µg/mL	陰性 ⁽⁵⁰⁾
Ames 試験	<i>S. typhimurium</i> TA1535, TA1537, TA1538, TA98, TA100	50~5000 µg/mL(-S9)	陰性 ⁽⁵¹⁾
	<i>S. typhimurium</i> G46, TA1535, TA1537, TA1538, TA98, TA100, C3076, D3052 <i>E. coli</i> WP2, WP2 <i>uvrA</i>	0.1~1000 µg/mL(-S9)	陰性 ⁽⁵²⁾
	<i>S. typhimurium</i> TA1535, TA1537, TA98, TA100, <i>E. coli</i> WP2 <i>uvrA</i>	312.5~5000 µg/plate(±S9)	陰性 ⁽⁵³⁾
染色体異常試験	培養ヒトリンパ球 ⁽⁵⁴⁾	50, 156.3, 250 µg/mL (-S9 ; 18h)	陰性 ¹
		300, 600, 1000 µg/mL (+S9 ; 3hr+15hr)	陽性 ² (1000 µg/mL)
		25, 100, 200 µg/mL (-S9 ; 18hr)	陽性 ³ ≥100µg/mL
		75, 150, 300 µg/mL (+S9 ; 3hr+15hr)	陽性 ⁴ (300 µg/mL)
	培養ヒト全血リンパ球 ⁽⁵⁵⁾	150, 200, 250, 300 µg/mL (-S9 ; 17.8hr)	陰性 ⁵
		1200, 1500, 1990, 2490 µg/mL(+S9 ; 3hr+15hr)	陽性 ⁶ (2490 µg/mL)
		700, 800, 900, 1000, 1100 µg/mL(-S9 ; 3hr+15hr)	陽性 ⁷ ≥800µg/mL
	チャイニーズハムスター卵巣 (CHO) 細胞 ⁽⁵⁶⁾	400, 800, 900, 1000 µg/mL (-S9 ; 4hr)	陰性 ⁸
		850, 875, 900 µg/mL (+S9 ; 4hr)	陰性
		65, 100, 250 µg/mL (-S9 ; 19hr)	陰性
前進突然変異試験 (Tk)	L5178Y マウスリンパ腫細胞	10~350 µg/mL(-S9)	陰性 ⁽⁵⁷⁾
		100~700 µg/mL(+S9)	陰性 ⁽⁵⁷⁾
		1~300, 325, 350 µg/mL(-S9)	陽性 ⁽⁵⁸⁾ ≥300µg/mL
		1~200, 225, 250, 275 µg/mL (+S9)	陽性 ⁽⁵⁸⁾ ≥200µg/mL
		50~225 µg/mL(-S9)	陰性 ⁽⁵⁹⁾
		75~275 µg/mL(+S9)	陽性 ⁽⁵⁹⁾

1 250µg/mL で mitotic index が67%に低下(次用量では22%)。

2 1000µg/mL で mitotic index が61%に低下(次用量では39%)。

3 200µg/mL で mitotic index が41%に低下(次用量では7%)。

- 4 300µg/mL で mitotic index が66%に低下(次用量では23%)。
- 5 300µg/mL で mitotic index が39%に低下(次用量では26%)。
- 6 2490µg/mL で mitotic index が25%に低下(次用量では5%)。倍数体及び核内倍化の増加はみられず。
- 7 1100µg/mL で mitotic index が48%に低下(次用量では0%)。倍数体及び核内倍化の増加はみられず。
- 8 $\geq 800\mu\text{g/mL}$ で diplochromosome が認められた。

上記のように、*in vitro* の試験においては Ames 試験で陰性、培養ヒトリンパ球、培養ヒト全血リンパ球、CHO 細胞を用いた染色体異常試験、前進突然変異試験(マウスリンパ腫細胞を用いた Tk 試験)の一部では陽性とする結果が報告されている。このうち、培養ヒトリンパ球の試験では、陽性対照を含め染色体型異常^dが多く認められており、データの質に疑問が持たれた。培養ヒト全血リンパ球の+S9 の試験は2490µg/mL で統計学的には染色体異常を有する細胞の増加が認められたが、この用量では mitotic index が陰性対照に対して25%に低下しており、かつ他の用量では異常は認められておらず、毒性学的に意味の低いものと考えられる。また、CHO 細胞では染色体異常は誘発されていなかった。なお、CHO 細胞では、-S9 の高用量で diplochromosome^eの増加が観察されているが、資料作成者はこのことと染色体異常誘発性との関係を直接示す事実はないと報告している。これはまれな現象であり毒性学的な評価は困難である。一方、前進突然変異試験では陽性所見が認められており、+S9 及び-S9 で染色体異常を示唆する小さなコロニーの出現頻度が増加しているとされている。

これらのことから、塩酸ラクトパミンは *in vitro* で染色体異常誘発を示唆する報告があるが、強いものではないと考えられる。

in vivo 試験

試験系	試験対象	ラクトパミン用量	結果
染色体異常試験	マウス骨髄	300, 600, 1200 mg/kg 単回経口投与 ¹	陰性 ⁽⁶⁰⁾
		200, 400, 800 mg/kg/日 14 日間経口投与 ¹	陰性 ⁽⁶¹⁾
小核試験	マウス骨髄	185.75, 371.5, 743 mg/kg/ 日, 2 日間 ¹	陰性 ⁽⁶²⁾
	ラット骨髄	50, 100, 200, 400, 600 mg/kg/日, 14 日間 ¹	陰性 ^{2 (63)}
姉妹染色体交換試験	チャイニーズハムスター骨髄	200~500 mg/kg	陰性 ⁽⁶⁴⁾

¹ 陽性対照としてシクロフォスファミドを使用。

² 50~200 mg/kg で多染色赤血球が傾向検定で有意となった、しかし400~600 mg/kg では影響無。

上記の通り、*in vivo* 試験では陰性であった。ラット骨髄を用いた小核誘導試験で50~200mg/kg の傾向検定で有意となったが、それぞれの用量と対照の間に有意差はなく、さらに高用量の試験では単独、傾向検定ともに有意差は認められなかった。

エピネフリンのようなカテコールアミンは、キノンを介した酸化傷害によって、*in vitro* で変異原性を示

^d 染色体型切断。通常化学物質によって誘発される染色体異常の多くは染色分体型である。

^e 染色体の内の1本あるいは数本が2本並列した状態をいう。

すとされている。ラクトパミンは構造上、酸化されてラクトパミンカテコールを生じる可能性がある。In vitro で観察された弱い染色体傷害に酸化傷害が関与する可能性を検討するため、いくつかの特殊な試験が実施されている。

【マウスリンパ腫細胞培養液中のラクトパミン及びラクトパミンカテコールの分析】⁽⁶⁵⁾

In vitro におけるラクトパミンからのラクトパミン-カテコールの生成が検討されている。マウスリンパ腫 L1578Y 細胞(TK3.7.2C)培養系にラクトパミン、S9、抗酸化剤、カテコールメチル転移酵素等を次の通り単独または同時に処理し、ラクトパミンカテコールを分析した。なお、カテコールメチル転移酵素は不安定なカテコールの検出を容易にするために加えられている。

- 1) ラクトパミン 350µg/mL±S9
- 2) ラクトパミン 350µg/mL+NAC^f1000µg/mL±S9
- 3) ラクトパミン 350µg/mL+SAM^g435µg/mL+ COMT^h80 単位±S9
- 4) ラクトパミン 350µg/mL+NAC1000µg/mL+SAM435µg/mL+COMT80 単位±S9

ラクトパミンカテコールの蓄積は、2) 及び 4) の+S9 条件下でのみ認められ、他の処理条件ではわずかであった。また、2) と 4) では 2) でより多く蓄積されている。S9 単独処理はラクトパミンカテコールの蓄積に関与せず、抗酸化剤である NAC は S9 存在下でラクトパミンカテコールの蓄積をかえって増加させた。S9 非存在下でも少量のカテコールが生成されたが、遺伝毒性を説明できるものではないとされている。

【マウスリンパ腫細胞の前進突然変異誘発性に及ぼす他の化学物質の影響】⁽⁶⁶⁾

マウスリンパ腫細胞(L1578Y TK⁺)遺伝毒性試験の一部に陽性結果が得られたことから、細胞の酸化状態に影響を与える様々な化学物質による、阻害または促進効果が検討されている。化学物質として、アスコルビン酸、プロプラノロール、SOD^k、カタラーゼ^j、SOD/カタラーゼ、3, 5-ジイソプロピルサリチル酸銅^m、NAC、N, N'-ジフェニル-1, 4-フェニルジアミンⁿ、BSO^oを用いている。また、SOD/カタラーゼを除き、S9 の非存在下で実施した。

ラクトパミンの変異原性は、アスコルビン酸、SOD、プロプラノロールで軽減されなかったが、NAC、カタラーゼ(-S9)により軽減された。カタラーゼの軽減作用は+S9 では認められなかった。また、BSO は変

^f N-アセチル-L-システイン：グルタチオンの前駆体で強い抗酸化力を有する

^g S-アデノシル-L-メチオニン：メチル基転移酵素の補酵素として働く

^h カテコール-O-メチル基転移酵素：水酸化カテコールをメチル化する酵素

ⁱ ここでは水溶性の抗酸化剤の代表として使用

^j β-遮断薬

^k Superoxide Dismutase：活性酸素の1種であるスーパーオキシドアニオン2分子から酸素と過酸化水素を生じる反応を触媒する酵素。ここでは、活性酸素のスカベンジャー

^l 過酸化水素の分解を触媒する酵素

^m スーパーオキシドアニオンを過酸化水素と水に分解する能力を有する

ⁿ ここでは脂溶性の抗酸化剤の代表として使用

^o L-buthionine-[S, R]-sulfoximine：グルタチオン産生を抑制する

異原性を増幅しなかった。

さらに、エピネフリン誘発変異原性についても同様に検討されている。アスコルビン酸、SOD、3,5-ジイソプロピルサリチル酸銅、NAC、N,N'ジフェニル-1,4-フェニルジアミンを用い、S9 非存在下での試験結果をラクトパミンにおける結果と比較した。エピネフリンの変異原性はNAC の他、アスコルビン酸によっても軽減され、ラクトパミンの挙動と差異が認められている。

結果は錯綜しているが、一部の試験で抗酸化剤が染色体異常を軽減したこと、また、ラクトパミンが培養液中でカテコールに酸化されたことを考慮すると、*in vitro* で認められた弱い染色体傷害性には、酸化ストレスが何らかの形で関与している可能性がある。

ただし、この染色体傷害性の作用機作については、さらに解明すべきと考える。

以上を総合的に判断すると、*in vitro* で染色体異常誘発性を示唆する報告があるものの、*in vivo* における小核試験等で陰性であり、生体にとって問題となるような遺伝毒性はないものと考えられる。

(6) 心臓血管系に対する特殊毒性試験

慢性毒性試験等の結果より、塩酸ラクトパミンの投与において観察される毒性及び生理影響のうち、最も鋭敏に観察されるのは、心臓血管系に対する作用と考えられる。このため、動物種間の感受性も含めて、一連の特殊毒性試験がイヌ、サル及びヒトにおいて実施されている。

①麻酔下のイヌにおける心臓血管系への急性作用⁽⁶⁷⁾

ペントバルビタール(30mg/kg 体重)麻酔下のビーグル犬 (雌雄各 2 匹)に塩酸ラクトパミン 0.035mg/kg 体重を 10 分間かけて静脈内投与し、投与前 5 分間及び投与期間中を含め 40 分間の血流動態をモニターした。なお、実験中に死亡した動物は認められなかった。

心拍数は、投与中に 65%増加し、観察期間中は少なくとも 50%増加の水準が維持された。

動脈圧は、平均では投与開始と共に対照のおよそ半分に急激に降下し、その後は徐々に回復したが、観察終了時でもおよそ 25%の低下が認められた。収縮期と拡張期では圧降下の程度は拡張期においてより大きく、結果として脈圧が増大していた。拡張期の脈圧は観察期間後期にはほぼ正常に回復したが、収縮期では徐々に回復しているものの、観察終了時でもおよそ 20%の低下が認められた。

心拍出量^p(Cardiac Output)は、投与開始とともに対照と比較して急激におよそ 50%増加し、観察期間中を通じて対照に比べおよそ 40%増加の水準が維持された。

一回拍出量^q(Stroke Volume)は投与開始時に一過的におよそ 12%増加したが、その後は低下に転じ、最大で対照と比べておよそ 18%低下し、観察中は低下傾向が続いた。一過的な SV の増大は主として心拍数の増加によるものと考えられた。

全末梢抵抗(Total Peripheral Resistance)は、投与開始直後に急激におよそ 65%低下した。その後は徐々に回復し、観察終了時には 50%低下にまで回復した。

大動脈流量ピーク(Peak Flow)は投与直後に急激におよそ 90%増加し、その後は観察期間終了時まで 70%前後の増加で安定した。

^p Cardiac Output ; 1 分間に心臓が送り出す血液の量。心機能評価の基本的指標となる。

^q Stroke Volume ; 1 心拍で駆出される血液の量。

^r 細動脈壁の平滑筋の収縮・弛緩による動脈径の変化に応じて血流の受ける抵抗。